

## 『視覚障害』400号の重みと来春のリニューアル

社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター  
理事長 引田 秋生

ガリ版刷りの『新時代』1・2合併号、『視覚障害』100号、200号、300号の記念号を読み、かつての錚々たる現役研究者、教育関係者、福祉関係者のレベルの高い生き生きとした論稿に触れた。そして、これらを経て、ここに400号記念号を世に送り出したことに、改めて月刊『視覚障害』の果たす役割の重大さをひしひしと感じている。

しかし、出版不況のご多分に洩れず、取り巻く状況は厳しい。長年の盲学校経験者が理事長に就任した途端の初仕事が、よりによって『視覚障害』の休刊では何とも寂しい話ではないか。

「続刊へ」と、私の背中を押してくれたのは、7月のチャレンジ賞・サフラン賞の授賞式である。二人の受賞者のスピーチもさることながら、同席した会社の上司のサポートの素晴らしさに感心してしまった。会社の障害者雇用率達成のために採用されたものの、あまり仕事がなく「窓際族」のような存在に結果的に甘んじている例も結構あると聞く。今回の受賞者のケースを丁寧取材し、その基本的対応姿勢やノウハウを、当事者や関係者の方々に情報として伝えていくことも、月刊『視覚障害』の果たしていく役割のひとつだということを痛感した。

続刊へ向けて、有識者及び若い読者に意見をいただきながらコンテンツを検証し、さらに、ロービジョンの方にも配慮した体裁を模索するなどして、来春のリニューアルに備えたい。

今は「乞うご期待」と言うのみである。